

Title	日本語の「のだ」と韓国語の「것이다」の対照研究：状況との関連づけの有無がもたらす表現の差
Author(s)	清水, 孝司
Editor(s)	
Citation	言語文化学研究. 言語情報編. 7, p.63-96
Issue Date	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/14247
Rights	

日本語の「のだ」と韓国語の「것이다」の対照研究
— 状況との関連づけの有無がもたらす表現の差 —

清 水 孝 司

言語文化学研究（言語情報編）

2012・3 第7号抜刷

大阪府立大学人間社会学部 言語文化学科

日本語の「のだ」と韓国語の 「것이다」の対照研究

—状況との関連づけの有無がもたらす表現の差—

清 水 孝 司

1. はじめに

日本語の「のだ」と韓国語の「것이다」の対照研究は以前から行われている。それは、日本語の「のだ」が、準体助詞の「の」に指定詞「だ」がついたもので、韓国語の「것이다」が、形式名詞「것」に指定詞「이다」がついたものという形態的な類似により、その表現されるものも類似が予想されるからである。

ところが、日本語「のだ」と韓国語「것이다」は、その表現において差がある。日本語「のだ」と比べた場合、韓国語の「것이다」には使用制限があると、先行研究でも指摘されている。

以下に、その差の具体例を挙げる¹。

(1) 家を出て

「あ、道がぬれているね」

「雨が降ったんだよ。たぶん1時間ぐらい前だろ」

「そう？知らなかった。雨にあわなくてよかった」

집에서 나와서

「어! 땅이 젖어 있네.」

「*응, 아까 비가 온 거야. 한 시간 정도 전이지
아마」

¹ (1) から (3) は作例である。以下、出典表示がないものは、作例である。作例に関しては、韓国語母語話者6人から正誤の判断チェックを受けている。

「그래? 몰랐어. 비 안 맞아서 다행이다.」

(2) 「私, 実は, 以前から金さんのことを知っているんです」

「*저, 실은, 이전부터 김씨를 알고 있는 거예요.」

(3) 友達が遅く来て

「ごめん. ごめん」

「遅いじゃないか. どうしたの」

「電車の事故があったんだ」

「本当に事故で遅れたのか? 前にもそんなこと言ってたよな」

「本当だよ. 本当に事故で遅れたんだよ」

「친구가 늦게 와서」

「미안, 미안.」

「늦었잖아. 무슨 일 있었어?」

「*전철 사고가 난 거야.」

「정말 사고 때문에 늦은 거야? 얼마 전에도 같은 말 하지 않았어?」

「정말이야. 정말 사고 때문에 늦은 거야.」

(1)は, 道がぬれている状況に対して, 説明を加える場面であるが, 「것이다」の使用は許容されない。(2)は, 自分が前からその人を知っていることを相手に知らせる場面であるが, 「것이다」の使用は許容されない。(3)のはじめの「のだ」は, 遅れてきた理由を相手に伝える場面であるが, 「것이다」の使用は許容されない。(3)のふたつめの「のだ」は, 事故で遅れたことが間違いないと言っている。これは「것이다」の使用が許容される。

以上の例のように, 日本語の「のだ」と韓国語の「것이다」の使用には差がある。先行研究では, 日本語の「のだ」はこのような表現ができ, 韓国語の「것이다」はこのような表現ができないといった「のだ」と「것이다」の表現の可, 不可の部分には立ち入っているが, なぜ表現の可, 不可の差が出るのかという統一的な説明はない。

本稿の目的は、日本語の「のだ」と韓国語の「것이다」の表現の差の原因を統一的に説明することである。あらかじめ本稿での主張を以下に簡潔に述べておく。なお、以下、日本語の「のだ」を使った文を「のだ」文、韓国語の「것이다」を使った文を「것이다」文とする。また、「のだ」文と関連づけられる状況や先行文脈を状況Pとする。

本稿では日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文の表現の差の原因を以下のふたつの点に求める。

- (i) 日本語の「のだ」文が状況Pと関連づけて言い表す文であるのに対して、韓国語の「것이다」文は、状況Pと関連づけて言い表す文ではない。
- (ii) 韓国語の「것이다」文は、名詞化によって他を排除し、結末を主張する文である。

上記(i)は、日本語の「のだ」文の特徴である状況Pと関連づけて言い表すことが韓国語の「것이다」文にはできないため、その使用において、「のだ」文と「것이다」文の使用には大きな差が出てくるということを示している。上記(ii)は、韓国語の「것이다」文が、名詞化されることによって他の選択肢を排除し、他でもなくこれが結末であると主張する構文だということを示している²。

つまり、日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文は、異なる意味を表す構文であり、先行研究で、日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文はその使用範囲が異なると述べられているのは当然なのである。文法化の度合いが違うため使用範囲が異なるとしている先行研究も多い。しかし、本稿では、日本語の「のだ」文も韓国語の「것이다」文も別の文法化が起こり、それにより、上記のように各々表す意味が異なった構文になったものとする。

以下、本稿では、会話文で用いられる「것이다」文を分析の対象とする³。小説の地の文等で用いられる「것이다」文と会話文で用いられ

² 名詞化によって他を排除することについては、野田(1997)でも名詞文の対比性として述べられている。

³ 小説の会話文と自然の会話文の両方を含めて分析を行った。

る「것이다」文には、用法の差があると本稿では考えるためである⁴。

2. 先行研究

2.1 「のだ」文

2.1.1 田野村忠温

田野村(1990)では、「のだ」文はあることがらの背後の事情を表すとして、次のように述べられている。

すなわち、あることがら α を受けて、 α とはこういうことだ、 α の内実はこういうことだ、 α の背後にある事情はこういうことだ、といった気持ちで命題 β を提出する。これが「 β のダ」という形の表現の基本的な機能であると言ってよい。以下では、このことを、「のダ」は「背後の事情」を表す、と短く表現することにする。

例えば、

きょうは休みます。体調が悪いんです。

という二文の連続における第二文について言えば、きょうは休むということ(α)を受け、そのことの背後にあるのは、体調が悪いということ(β)だと述べているわけである。

(田野村 1990 p. 5)

つまり、田野村(1990)では、「のだ」文にはことがら「 α 」があつて、その「 α 」の「背後の事情」として「 β のだ」と表されるとしている。本稿でも、「のだ」文には、田野村(1990)のいうことがら「 α 」があると考える。そして、本稿ではそれを状況Pとしているのである。

⁴ 先行研究の金(2007)や印(2006)でも会話文と地の文を分けて分析が行われている。それは、印(2006)でも指摘されているが、会話文と地の文では「것이다」文の使用に大きな差が見られるためである。

2.1.2 佐治圭三

佐治 (2003) では、「のだ」文について次のように述べられている。

「X のだ」は、その文が述べられる時の状況の中にある、Y なる事態に関わって、X なる事態が既定のものとしてあることを表すものである。なお、Y はことばとして言い表されることもあるが、言い表されないこともあり、ことばで言い表すことがほとんど不可能な場合もある。たとえば、

《夜、耳をすますと、パラパラという音が聞こえてくる》雨が降っているのだ。

においては、《パラパラという音が聞こえてくる》ことが Y なる事態であり、それに関して、《雨が降っている》こと (X なる事態) を既定の事態だとして判断したのが「雨が降っているのだ」という文になるのである。

(佐治 2003 p.24)

つまり、佐治 (2003) では、「パラパラという音が聞こえてくる」という「Y なる事態」と関連づけ、「雨が降っているのだ」という「のだ」文が言い表されているとしている。そして、「Y なる事態」は、先行文に表されることもあれば、発話時の状況である場合もあるとしている。

本稿でも、「のだ」文には佐治 (2003) で述べられている「Y なる事態」があると考え。そして本稿では、それを状況 P としているのである。

田野村 (1990) と佐治 (2003) は、「のだ」文についての捉え方が異なるところもあるが、「のだ」文には本稿でいう状況 P が存在するという点では共通している。

そして、本稿では、「のだ」文は状況 P に関連づけて言い表す文であると考え。

2.1.3 野田春美

野田（1997）では、「のだ」文をムードの「のだ」とスコープの「のだ」に分けている。そして、野田（1997）では、ムードの「のだ」文を次のように4分類している。

表1 野田（1997）の4分類

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味としてQを把握する 「山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ」	Pの事情・意味としてQを提示する 「僕、明日は来ないよ。用事があるんだ」
非関係づけ	Qを（既定の事態として）把握する 「そうか、このスイッチを押すんだ」	Qを（既定の事態として）提示する 「このスイッチを押すんだ」

野田（1997）の「関係づけ」というのは、本稿でいう「状況Pと関連づけている」という意味である。野田（1997）では、「のだ」文を「関係づけ」と「非関係づけ」に2分類している。

本稿では、野田（1997）の言うような「非関係づけ」の「のだ」文を認めず、すべて「関係づけ」の「のだ」文と考える。つまり、「のだ」文はすべて本稿でいう状況Pを持つと考える。

その理由は次のとおりである。表1の対事的ムードの「のだ」の非関係づけの例として次の（4）のような文がある。

（4）「そうか、このスイッチを押すんだ」

（4）の文は、たとえば、「困っていて、何か解決策を考えている」というような状況Pがないと成立しないと本稿では考える。（4）の文は、困っていて、何か解決策を考えている状況があり、その打開策がわかった時に発せられると考えるのである。

同様に、次の（５）と（６）の文の差も状況Pが関わっていると考える。

（５）「ああ、お母さんが来たんだ」

（６）「ああ、お母さんが来た」

（５）の文は、たとえば、帰宅して、一人暮らしの自分の部屋がきれいに掃除がしてある状況を見て発する言葉として成立するが、（６）の文はそのような状況では発することができない。（６）の文は、たとえば、むこうから母親がやってくるのを見つけた際に発することが可能な文である。つまり、（５）の「のだ」文は、状況Pに関連して言い表されているが、（６）の文は、母が来る状況そのものを表しているのである。

また、表１の対人的ムードの「のだ」の非関係づけの例として、次の（７）のような文が出ている。

（７）「このスイッチを押すんだ」

この文は、聞き手に「スイッチを押しなさい」と指示している文である。この文も、たとえば、「聞き手が何かしないといけない」というような状況Pがあると本稿では考える。このような状況と関連づけないと上記（７）の文は成立しないと考えるのである。いきなりなんの状況もなく、誰かに「このスイッチを押すんだ」とか「立つんだ」とか言われても、命令や指示と理解するのは難しい。

これについては、田野村（１９９０）に次のような記述がある。

このことに関して補足すると、尾上圭介氏が挙げておられる例が興味深い。それは、外国のテレビドラマの吹替えのせりふにおけるものであるが、座ろうとしない相手を座らせようとして発することだが、「お座り」「座れ」「座るんだ」のように変わってい

くのである。「お座り」から「座れ」への変化は単に話し手の態度の硬化によるものであろうが、注目に値するのは、「座るんだ」という言い方が、「お座り」「座れ」という純粋な命令の言い方の後に現れているという点である。これは、偶然のことではなからう。上述したように、「座るんだ」が命令の働きをすと言っても、その命令の意味合いは、「おまえがすべきことは座ることだ」といった基本的な意味から生じるものと考えられる。とすれば、聞き手が話し手の要求をすでに承知している状況こそ、「のだ」が命令に用いられやすいことになる。この意味で、「座れ」から「座るんだ」への移行は、逆の方向の移行よりも自然な流れを表していると言える。

(田野村 1990 p. 24-25)

ボクシングの選手に向かって「立て！立つんだ」というのも、「立て！」が先にあり、ボクシングの試合会場という状況だから理解ができるのである。つまり、状況の支えがあってこそ、「立つんだ」という「のだ」文の意味が理解されるといえる。それゆえ、上記(7)の文にも状況Pがあると考えるのである。

以上の理由で、本稿では「のだ」文はすべて状況Pがあると考える。

スコープの「のだ」文については、益岡(2007)が次のように述べている。

野田は、例えば(8)では「の」によって「悲しいから泣いた」が名詞化され否定のスコープに入るために、「悲しいから」の部分が否定のフォーカスになることができると主張する。

(8) 悲しいから泣いたのではない。

本章ではまずこの野田の分析について考えてみたい。

野田の見方に対して、益岡(1991)で述べた趣旨を繰り返すことになるが、スコープの「の(だ)」をムード(モダリティ)の「のだ」と特に峻別する必要はないというのが本書の考えである。

つまり「のだ」を用いるかどうかは表現のタイプの違いの問題であり、スコープ・フォーカスの問題は二次的な問題に過ぎないということである。以下では、この点について益岡（1991）の論点をより明確な形で述べてみたいと思う。

益岡（1991）では、次の（9）と（10）は表現タイプが異なると考えたのであった。

（9）選手達は泣いていない。

（10）選手たちは泣いているのではない。

（9）は「選手たちが泣いている」という事態が存在しないことを表している。一方、（10）はある事態の存在は認めたとえその事態が「泣いている」と捉えられるべきではないということを表している。

（益岡 2007 p.86）

本稿でも、益岡（2007）と同様に、スコープ・フォーカスの問題は二次的な問題に過ぎないととらえ、スコープの「のだ」文がムードの「のだ」文と独立して存在するとは考えない。そして、いわゆるスコープの「のだ」文にも、状況P、上記（10）の文では選手たちが何かしている状況が存在すると考える。

2.2 「のだ」文と「것이다」文の対照研究

この節では、日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文の対照研究を行っている先行研究とその問題点を見てゆく。

2.2.1 崔真姫

崔（2005）は次のように述べている。

「のだ」と「것이다 geosida」の使用条件が異なる原因は文法化の度合いに関係している。「のだ」は文連結の機能と態度表明の機能まで発達しているが、「것이다 geosida」は名詞化の機能

が強く残っており、態度表明の機能としてまだ定着していない。つまり、「のだ」に比べ、「것이다 geosida」は文法化が進んでいないため、使用制約が強いと考えられる。（崔 2005 p.58）

崔（2005）は、上記のように文法化の度合いが日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文の使用の差の原因だとしている。そして、文法化が進んでいる段階を、名詞化の機能・文連結の機能・態度表明の機能の順に分けて、文法化が進んでいる日本語の「のだ」文と、文法化が進んでいない韓国語の「것이다」文が表現できる機能は違うとしている。

そして、次のような表を挙げて、「のだ」文と「것이다」文の類似点と相違点を示している。

表2 「のだ」と「것이다 geosida」の類似点

類似点 \ 形式	「のだ」	「것이다 geosida」
名詞化の機能	あり	あり
文連結の機能	あり	あり

表3 「のだ」と「것이다 geosida」の相違点

類似点 \ 形式	「のだ」	「것이다 geosida」
態度表明の機能	あり	なし
文連結の機能	前置きの用法の機能	なし
	原因・理由を問う文での必須性	低い

崔（2005）は、先行文脈や状況とある事態を関係づける機能を持つものとして文連結の機能を挙げ、先行文脈や状況とある事態を関係づ

ける機能を持たないものとして態度表明の機能を挙げている。そして、「のだ」と「것이다 geosida」の類似点があるものとして文連結の機能を、類似点がないものとして態度表明の機能を挙げている。

しかし、文連結の機能に関しては、表2では「のだ」と「것이다 geosida」には類似点があるとしながらも、表3では「것이다 geosida」に前置きの用法の機能はなく、原因・理由を問う文での必須性は低いとしている。つまり、文連結の「のだ」は、類似点があるものもないものも含まれるということである。名詞化の機能から文連結の機能へ、そして態度表明の機能へと文法化が進むという考えのために、文連結の機能の中にいろいろなものを入れたという感があり、統一的な説明になっていないように思われる。

2.2.2 金廷珉

金(2007)では、「것이다」文を小説の会話文と地の文に分けて分析し、韓国語の「것이다」は、会話文より地の文のほうが日本語の「のだ」と対応していると指摘している。

また、特に会話文の中で、私的領域に関する情報を聞き手に伝える場合には、「のだ」が必須なのに対して、「것이다」は不自然になると指摘している。そして、以下の二つの例を挙げている。

- (11) 私、この学校に入りたいの!
나 이 학교에 들어오고 싶어요.
- (12) 僕、小児麻痺なんだ。
나 소아 마비야.

(金 2007 p.130)

他にも「のだ」と「것이다」の対応、非対応の例が挙げられているが、その原因については記載がない。

2.2.3 印省熙

印 (2006) では、会話文を「話し手の感情」「意味的關係」「その他」に分類し、「のだ」と「것이다」の対応・非対応を精密に考察している。そして、その下位分類として、「反意」や「意外・驚き」「ニュートラル」の場合、「因果關係」を述べる場合、「判断」を述べる場合等、おのおの例を挙げて、非常に示唆に富んだ考察が見られる。

さらに、「것이다」に関しては、強い意見主張が多く、強調的であるのに対して、「のだ」は強調に限らないとしている。そして、「のだ」文と「것이다」文の対応の差の原因を、モーダルな形式としての発達、未発達に求めている。

3. 韓国語の「것이다」文で表せる「のだ」文と表せない「のだ」文

3.1 韓国語の「것이다」文で表せない「のだ」文

本稿では、日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文の表現の差の原因を、以下のふたつの点に求めると主張している。

- (i) 日本語の「のだ」文が状況Pと関連づけて言い表す文であるのに対して、韓国語の「것이다」文は、状況Pと関連づけて言い表す文ではない。
- (ii) 韓国語の「것이다」文は、名詞化によって他を排除し、結末を主張する文である。

以下、韓国語の「것이다」文で表せない「のだ」文を見ながら、上記の主張から説明を加えてゆく。

3.1.1 原因・理由

韓国語の「것이다」文は、日本語の「のだ」文が表せる原因・理由が表せない。次の (13) (14) (15) の文が、そのような例である。

(13) 家を出て

「あ、道がぬれているね」

「雨が降ったんだよ。たぶん1時間ぐらい前だろ」

「そう? 知らなかった。雨にあわなくてよかった」

집에서 나와서

「어! 땅이 젖어 있네」

「*응, 아까 비가 온 거야. 한 시간 정도 전이지 아마」

「그래? 몰랐어. 비 안 맞아서 다행이다」 ((1)の再掲)

(14) 友達と二人で話している

「今から飲みに行かない?」

「ごめん, 明日早く出勤するんだ. また今度」

「残念だな. 加藤さんも来るのに」

「あ, そうなの. じゃ, ちょっとだけ行こうかな」

친구와 들어서 이야기하고 있다.

「지금부터 한 잔 하러 안 갈래?」

「*미안. 내일 일찍 출근하는 거야. 다음에.」

「아쉽네. 가토씨도 오는데.」

「어? 그래? 그럼, 잠시라도 갈까?」

(15) 震えながら相手に

「寒いんです. 暖房をつけていただけますか」

「すみません. 今この部屋は暖房が故障しているんです」

「あ, そうですか. じゃ, 他の部屋で待っています」

떨면서 상대방에게

「*추운 거예요. 난방 좀 켜 주실래요?」

「죄송해요. *지금 이 방은 난방이 고장 난 거예요.」

「어? 그래요? 그럼, 다른 방에서 기다릴게요.」

(13) では、道がぬれている理由を表すのに「것이다」文は使えない。また、(14) (15) の文のように、今日飲みに行けない理由や震えている理由、暖房が入られない理由を言い表すことができない。

崔 (2005) でも、次の (16) のような文を挙げて韓国語でも可能だが、必須性は低いものとして挙げている。(16) の韓国語では「것이다」文が使われていない。

- (16) ユジン 「(ミニョンの言葉を遮り, 丁重に) 昨日は・・・大変失礼致しました。わたしが酔って理事を他の人と錯覚してしまったんです。」
 어젠・・・ 실수가 많았습니다. 제가 술에 취해서 이이사님을 다른사람으로 착각했어요.

(『冬のソナタ』 p.98)

(16) は「失礼な行動」に対する事情として, 「他の人と錯覚した」ことを提示している。このような場合, 「のだ」の必須性は高いが, 「것이다 geosida」の必須性はかなり低い。
 (崔 2005 p.55)

(16) の文に「것이다」文が使われていない理由を, 本稿では, 韓国語の「것이다」文が, 状況Pと関連づけて言い表す文ではないからだと考える。日本語の「のだ」文は, 状況Pと関連づけてその原因・理由を表せるが, 韓国語の「것이다」文はそれができないのである。

また, 次のような「実は」がついて事情を語る文も, 「것이다」文では言えない。

- (17) 二人で話している
 「実は, 来月結婚するんです。それで忙しいんです」
 「そうですか。おめでとうございます」
 둘이서 이야기하고 있다.
 「*실은, 다음달에 결혼하는 거예요. 그래서 바빠요」
 「그래요? 축하해요.」

崔 (2005) でも, 次の (18) の文を挙げて, このような話題の切り出しの文は, 韓国語の「것이다」文は対応しないとしている。よって, (18) の韓国語の文は「것이다」文で表されていない。

- (18) ユジン 「(このままでは涙がでそうですばやく) 今日, チェ

リンに会ったんです」
 오늘, 채린이 만났어요.

(崔 2005 p. 55)

崔 (2005) では、上記 (18) の文が「것이다」文で言えない理由は、文法化がそこまで進んでいないからということである。しかし、前述したように、本稿では、文法化の進展の度合いにその理由を求めない。文法化していることは認めるが、「것이다」文が許容されないのは、「것이다」文が状況 P と関連づけて言い表す文ではないからだと考える。

上記の (18) の文は、今の自分の状況を説明する文である。「実は、今日チェリンに会ったんです」というように、「実は」を入れても文意は変わらず、自分の身に起こった状況を、聞き手に説明している文であると考えられる。チェリンに会って何か聞いた状況や、チェリンと楽しい時間をもった状況等を、聞き手に知らせようとしている。「実は来月結婚するんです」のような文も同様である。たとえば、結婚するから別れてほしいという状況や、とても忙しくしている自分の状況を聞き手に知らせようとしているのである。韓国語の「것이다」文は、そういった状況 P と関連づけて言い表す文ではないので、許容できないのである。

同様に、「것이다」文では、雨が降っている状況を「雨が降っているんです」と教えたり、遅れて来た時にその理由として「事故があったんです」とは言えないのである。

3.1.2 命令

金 (2007) では、校長先生が生徒に向かって話している場面の例を挙げ、次の (19) のような命令は、「것이다」文に対応しないとしている。

(19) これからテントの張り方を教えるから、よく見てるんだよ.
 지금부터 텐트 치는 법을 가르쳐 줄테니 잘 보거라.

(金 2007 p. 130)

一方で、金（2007）は、次の（20）のような例文を挙げて、命令が「것이다」文に対応しているとしている。

（20）「九品仏のお寺の、お庭はいいけど、本堂はぬぐの！」とか教えてあげた。

구혼부즈 절에서도 마당에선 괜찮지만 본당에선 벗는 거야! 라며 가르쳐 주었다. (金 2007 p. 129)

上記のように、金（2007）では、一方の（19）は「것이다」文で表現できないと指摘し、もう一方の（20）は「것이다」文で表現できると指摘している。指摘のみでその理由については記述がない。

本稿では、このふたつの文が、「것이다」文で表現できない文と表現できる文に分かれる理由を次のように考える。上記（19）の文は、今ここでする行動を表し、「よく見なさい」と命令している。韓国語の「것이다」文は、そのような状況では命令として使いにくいのである。それは、韓国語の「것이다」文が、状況Pと関連づけて言い表せないためである。つまり、日本語の「のだ」文は、聞き手に今そう行動する状況であるということを知らせることで、今ここで行動を起こせという命令の機能を持つ⁵。しかし、韓国語の「것이다」文は、聞き手の状況Pと関連づけては言い表せないため、今ここでする行動を「것이다」文で表すのが難しいのである。

よって、次の（21）のような文も、今の状況と関連づけての命令表現なので「のだ」文は許容されるが、「것이다」文は許容が難しい。

（21）戦闘中に爆弾が落ちてくる音が聞こえる。

「爆弾だ！！みんな、伏せろ。伏せるんだ」

전투 중에 폭탄이 떨어지는 소리가 들린다.

「폭탄이다!!! 모두, 엎드려. *엎드리는 거야.」

⁵ 日本語の「のだ」文の命令の用法については、2.2節で田野村（1990）を引用した。

一方、上記(20)の「お寺の本堂では靴を脱ぐの」という「것이다」文は、社会的通念として一般的にそうするもの、そうすべきものとして表現している。つまり、「お寺では靴はぬぐものだ」と教える表現なのである。韓国語ではこのような一般的にそうすべきもののだという表現も、「것이다」文で表現される。たとえば、「お年寄りには親切にするものだ」という表現である。それが命令の機能として使われているのである。

次の(22)の例も、一般的にそうするもののだということを言い聞かせ、教えることによって、そのように行動するように命令している。

(22) 図書室でうるさい子供に

「いい? 図書室では静かにしないといけないのよ」
 도서실에서 시끄러운 아이에게
 「알겠지? 도서실에서는 조용히 해야 되는 거야.」

その他、「学校へ行ったら先生の言うことをよく聞くのよ」「銃はこのように撃つんだ」と教諭するような文が、「것이다」文で表現できるのも同様の理由である。

また、一般的にそうすべきもののだということから、次の(23)のように、そのようにしなさいという個人的な命令にも使われると考えられる。

(23) ミニョン「(決心したように) もう、君を放さない。どこにも行かせないし、誰にも渡さない」

유진 「————」

미니ョン 「(유진의顔を両手ではさんで) 僕の言うとおりにするんですよ。・・答えて・・これからは僕のやるとおりについてくるんですよ」

민형 「(결심한 듯)이젠 안보낼 거예요.

어디에도 누구한테도 안보낼 거예요.」

유진 「.....」

민형 「(유진의 얼굴을 잡고)내가 하자는 대로 하는

거예요...

대답해요... 이젠 내가 하자는 대로 따라 오는

거예요.」

(『冬のソナタ』 p. 165)

3. 1. 3 自分の状況

印 (2006) は「～したい」などの感情形容詞が前接しているものは「것이다」文では表しにくいとしている。また、金 (2007) でも次の (24) の例を出して「것이다」文では対応しないとしている。

(24) 私, この学校に入りたいの!

나 이 학교에 들어오고 싶어요.

((11) の再掲)

(金 2007 p. 130)

このような感情形容詞が「것이다」文で対応しにくい理由も、本稿では韓国語の「것이다」文が状況 P と関連づけて言い表す文ではないところに求める。つまり、上記 (24) の「のだ」文は、自分の今の状況と関連づけて言い表せるため許容されるが、「것이다」文は、自分の今の状況と関連づけて言い表せないため許容されないのである⁶。よって、韓国語は、「것이다」文を使わず、「私, この学校に入りたい」という表現になっているのである。

また、金 (2007) で掲載されている次の (25) の文も同様に自分の状況と関連づけて語っているが、韓国語の「것이다」文は、その状況と関連づけては言い表せないのである。よって韓国語の訳は、「僕, 小児麻痺だ」となっており、「것이다」文は使われていない。

(25) 僕, 小児麻痺なんだ。

나 소아 마비야.

((12) の再掲)

(金 2007 p. 130)

⁶ 第三者の状況を表す場合は、伝聞や推測表現を使うのが一般的と考えられる。

3.1.4 納得

納得というのは、野田（1997）でいう非関係づけの対事的ムードの「のだ」である。

印（2006）では、次のような例を挙げて、「것이다」文とは対応しないとしている。

(26) 「ああ、そうだ、今日は父親が出張だったんだ」

「아 참. 그렇지. 오늘 아버지 출장가셨지」

(印 2006 p. 83)

本稿でも、この納得の用法は、基本的には「것이다」文とは対応しないと考える。それは2.1.3節でも述べたとおり、「のだ」文はすべて本稿でいう状況Pを持つと考えており、野田（1997）の非関係づけの対事的ムードの「のだ」についても同様に考えるからである。上記(26)の文は、たとえば、父親が家にいない状況があり、その状況と関連づけて発せられていると考えられる。韓国語の「것이다」文は、状況Pと関連づけて言い表すことができないため、使用されていないと考えられる。

同様に、次の(27)の文も「것이다」文では表現できない。

(27) 天気予報で雨が降っているソウルの様子を見ながら

「ソウルではこんなにたくさん雨が降っているんだな」

일기예보에서 비가 오는 서울의 영상을 보여 주며,

「*서울에는 저렇게나 많이 비가 오는 거구나.」

また、次の(28)の文も「것이다」文では許容できない。

(28) 外国人が流暢に日本語を話しているのを見ながら

「外国人なのに日本語を上手に話すんだな」

외국인이 유창하게 일본어로 이야기하는 모습을 보면서

「*외국인인데 일본어를 잘하는 거구나.」

しかし、上記 (27) の文も、次のように文を変えると「것이다」文でも許容できる。

- (29) 「ロケットを打ち上げてこのようにすれば砂漠にも雨が降る
んだな
「로켓을 쏘아서 이렇게 하면, 사막에도 비가 오는
거구나.」

また、次の (30) のような「것이다」文も許容される。

- (30) ジュンサン 「——？」
ジヌ 「こんなに・・・お前のお祖父さんに似ているのに・・・
今まで気づかなかったのが不思議だ。だからお前のこ
とがあんなに心に深く残っていたんだなあ」
준상 「？」
진우 「이렇게... 니 할아버지를 닮았는데... 내가 지금까지
몰랐다는게 이상해. 그래서 니가 그렇게 내 마음에
남았던거구나.」

(『冬のソナタ』 p.347)

なぜであろうか。それは、(29) と (30) の「것이다」文が、名詞化によって他を排除し、これが結末だと主張する文になっているからだと考えられる。「あ、雨が降っているんだ」というように、その場の状況を見て納得する場合、韓国語の「것이다」文では言い表せない。しかし、上記 (29) や (30) の文のように、「～すれば、～するのだな」「～から、～したのだな」という文にすると、そういう訳で、他でもなくこの結末に至ったと言い表すことになる。そのような場合は、「것이다」文が許容されるのだと考えられる。

3.1.5 「のだから」

「のだ」文に「から」が後接し、「のだから」となった文は、使われる環境によって正誤が分かれる。次の(31)と(32)の文を見ていただきたい。

- (31) 「田中にも料理作ってやろうかな」
 「あいつはさっき腹一杯食べたから、もう食べられないと思うよ」
 「다나카한테도 요리를 만들어 줄까?」
 「그 녀석은 아까 배불리 먹었으니까, 더 못 먹을 거야.」
- (32) 「田中にも料理作ってやろうかな」
 「*あいつはさっき腹一杯食べたんだから、もう食べられないと思うよ」
 「다나카한테도 요리를 만들어 줄까?」
 「*그 녀석은 아까 배불리 먹은 거니까, 더 못 먹을 거야.」

日本語は、「のだから」が使われていない(31)の文は許容されるが、「のだから」が使われている(32)の文は許容されない。韓国語も、「것이다」文が使われない(31)の文ならば許容されるが、「것이다」文を使う(32)の文だと許容されない。

では、次の(33)と(34)の文を見ていただきたい。

- (33) 「*おれはおまえの父親だから、何でも相談しろよ。遠慮なんかするな。」
 「ごめん。おとうさんに心配かけたくなかったんだ。」
- (34) 「おれはおまえの父親なんだから、何でも相談しろよ。遠慮なんかするな。」
 「ごめん。おとうさんに心配かけたくなかったんだ。」

日本語は、「のだから」が使われていない (33) の文は許容されず、「のだから」が使われている (34) の文は許容される。しかし、韓国語は、次の (35) のように「것이다」文を使わない文しか許容されない。

- (35) 「난 네 아버지니까, 뭐든 상담해. 사양 같은 거 하지 말고.
「미안해. 아버지한테 걱정 끼치고 싶지 않았어.」

つまり、韓国語の「것이다」文は、日本語の文のようには、「のだから」の使用と不使用の文の差は表さないということである。上記の「のだから」を使った文は、「것이다」文を使わない文で表すのである。相手と情報を共有しているかどうかで、「のだから」の使用と不使用が決定される日本語と異なり、韓国語は、情報の共有では、この部分での「것이다」文の使用と不使用は決定されないということである。

一方、次の (36) のような文は異なる振る舞いをする。(36) の文では、「のだ」文も「것이다」文も許容されるのである。しかし、(37) の韓国語では、「것이다」文が使用されていないと、許容が若干落ちると判断する韓国語母語話者がいた。

- (36) 友達が遅く来て
「ごめん. ごめん」
「遅いじゃないか. どうしたの」
「電車の事故があったんだ」
「本当に事故で遅れたのか? 前にもそんなこと言ってたよな」
「本当だよ. 本当に事故で遅れたんだから, 信じてくれよ」
「친구가 늦게 와서」
「미안, 미안.」
「늦었잖아. 무슨 일 있었어?」
「전철 사고가 났어.」

「정말 사고 때문에 늦은 거? 얼마 전에도 같은 말 하지 않았어?」

「정말이야. 정말 사고 때문에 늦은 거니까, 믿어줘.」

(37) 友達が遅く来て

「ごめん. ごめん」

「遅いじゃないか. どうしたの?」

「電車の事故があったんだ」

「本当に事故で遅れたのか? 前にもそんなこと言ってたよな」

「*本当だよ. 本当に事故で遅れたから, 信じてくれよ」

「친구가 늦게 와서」

「미안, 미안.」

「늦었잖아. 무슨 일 있었어?」

「전철 사고가 났어.」

「정말 사고 때문에 늦은 거? 얼마 전에도 같은 말 하지 않았어?」

「? 정말이야. 정말 사고 때문에 늦었으니까, 믿어줘.」

(36)の「것이다」文が許容されるのは、「것이다」文が名詞化によって他を排除し、結末を主張する文になっているからだと考えられる。つまり、先に見た(31)から(35)の文では、「父親なんだから」とか「さっき食べたから」と、ただ理由を述べているだけで、結末を主張しているわけではないので、「것이다」文を使う必要はないのである。ところが、(36)の場合は、一度理由を言っても相手が信じてくれず、本当に事故でそのような結末になったと、理由と結末を提示して強く主張している。このような場合は、「것이다」文が許容されやすくなるのである。

(37)の「것이다」文が使われていない文の許容が若干落ちるのは、上述したように、理由と結末を提示して、事故の結果遅れたということ強く主張しているにもかかわらず、「것이다」文が逆に使われてい

ないためだと考えられる。

3.2 韓国語の「것이다」文で表せる「のだ」文

この節では、韓国語の「것이다」文で表せる「のだ」文を見ながら、本稿の主張から説明を加えてゆく。本稿の主張は、以下の通りであった。

日本語の「のだ」文が、状況Pと関連づけて言い表す文であるのに対して、韓国語の「것이다」文は、状況Pと関連づけて言い表す文ではない。韓国語の「것이다」文は、名詞化によって他を排除し、結末を主張する文である。

3.2.1 スコープの「のだ」

崔 (2005) は、「것이다」文でも表現可能な文として、名詞化の「のだ」文を挙げている。前接部分を名詞化するために必須の「のだ」であり、文内部の要素に焦点を当てるために用いられるとしている。これは、野田 (1997) のスコープの「のだ」であり、次のような文が該当する。

- (38) 「わざと話したんじゃありません」
 「일부러 이야기 한 것은 아니에요.」

上記 (38) のような否定文のスコープの「のだ」の場合は、韓国語の「것이다」文で表現できる。それは本稿でも同意見である。韓国語の「것이다」文も、形式名詞「것」を使っている以上、名詞化の機能があると考えからである。

むしろ、韓国語の「것이다」文が、名詞化によって他を排除し、他でもなくこれが結末だと主張していることを考えれば、韓国語の「것이다」文は、スコープの「のだ」を表していると考えられることもできよう。上記 (38) の文も、「うっかり話したのであって、わざと話したんじゃありません」と結末を主張していると考えられる。

しかし、韓国語の「것이다」文は、スコープの「のだ」を表すことはできるが、以下の理由でスコープの「のだ」にはおさまりきれないと考える。

ひとつは、韓国語の「것이다」文が話者の主張を強く含んでいるからである。印 (2006) では、「のだ」文と「것이다」文が対応する場合のひとつとして、話し手にとって不本意なことや意外なことを取り出して、強調して伝える場合が挙げられている。そして、次の (39) のような例を挙げている⁷。

- (39) 「ところが、その時さ、チクショー、よりによってなあ、きみのことを思い出したんだ。」
 「그런데 빌어먹게도 하필이면 그때 니 생각이 난 거야…」
 (印 2006 p. 59)

さらに、印 (2006) では、「のだ」文に「것이다」文が対応しない場合は、話し手の感情として「ニュートラル」なことがらを述べる場合であるとしている。つまり、上述した不本意なことや意外な感情を含まない文である。そして、その例として、次の (40) のような文を挙げている。韓国語は「것이다」文が使用されていない。

- (40) 何度目かの休みに戻ってみると、天野家には、人が出入りしていて葬式が出るらしい気配だった。
 「誰か亡くなったんですか」 つぎは尋ねた。
 「奥さんが、脳溢血で急死されたんです」
 몇 번째인가 휴일에 돌아와 보니 아마노가에는 사람들이 드나드는 것이 장례식이 치러지는 기색이었다.
 「누가 죽었어요?」 쓰기는 물었다.
 「부인이 뇌일혈로 급사하셨어요。」 (印 2006 p. 61)

⁷ 本稿では、(39) の文は 3.2.4 節の新事態提示の「것이다」文と考える。

上記のように、韓国語の「것이다」文は、話し手の主張が強く表れる場合に使われ、日本語のスコープの「のだ」にない特徴を持っていると言える。

また、次の(41)の文のような、「うっかり」に焦点が当たっている肯定文のスコープの「のだ」も、韓国語の「것이다」文にするとやや許容が難しくなる。ただ理由を述べているだけだからである。

- (41) 「言ってはいけないと言ったのに、言ってしまったの？」
 「うっかり言ってしまったんです。すみません」
 「말하면 안 된다고 했는데, 말해 버린 거야?」
 「? 무심코 말해 버린 거예요. 죄송합니다.」

ただし、同じ「うっかり言ってしまったんです」という文でも、それを以下の(42)のような文脈にすると許容される。

- (42) 「言ってはいけないと言ったのに、言ってしまったの？」
 「わざと言ったんじゃないんです。うっかり言ってしまったんです。すみません。」
 「말하면 안 된다고 했는데, 말해 버린 거야?」
 「일부러 이야기 한 것은 아니예요. 무심코 말해 버린 거예요. 죄송합니다.」

上記(41)と(42)の例の違いは、(42)のほうが、「わざとではなく、うっかり言ったのだ」というように一方を否定し、別のものを結末として主張している点である。「것이다」文の許容度を上げるためには、「～ではなく～のだ」「～から～のだ」というような文の形式の支えによって、これが結末だと主張する必要があるのである。この点もスコープの「のだ」と異なる特徴であるといえよう。

さらに、「것이다」文は、「年寄りには親切にするものだ」「一日に8時間寝るということは、人生の三分の一は寝ているということだ」

というような文を表す役割も担っている。

よって、本稿では、「것이다」文が名詞化によってスコープ・フォーカスの機能を持ちはするが、スコープ・フォーカスの機能だけではおさまりきれない機能を持っていると考える。それゆえ、韓国語の「것이다」文は、名詞化によって他を排除し、結末を主張する文であるとした。

3.2.2 因果関係の「것이다」文

印(2006)では、因果関係を述べる場合は、「것이다」文が対応する場合と対応しない場合があるとしている。対応する場合は、「だから、から、だからこそ、ために、～して、それで」などの理由の接続詞や接続助詞が現れ、因果関係がはっきりしている場合が多いとしている。そして、対応していない場合は、「のだ」を含む節や文が原因・理由を表す部分に現れ、許可を求めたり、弁解や言い訳のために事情を説明したりする場合であるとしている。本稿でもこの立場を支持する。

印(2006)は、次の(43)の文を挙げている。この例文は、「것이다」文が許容されやすい「～だから～のだ」という形式になっている。

(43) 「どうしてそんなに日焼けしているの？」

「二週間くらいずっと歩いて旅行してたんだよ。あちこちリュックと寝袋かついで。だから日焼けしたんだ。」

「그런데 왜 그렇게 탄 거죠?」

「두 주일 정도 도보 여행을 했다랬어. 여기저기.

배낭과 침낭을 둘러메고. 그래서 탄 거지。」

(印 2006 p. 68)

印(2006)では、次の(44)の文のような、「原因」「のだ」+「結果」の構造をしていると許容が難しくなり、次の(45)の文のように、「理由」+「結果」「のだ」となれば許容が高くなるとしている。

- (44) 電車の事故があつたんです。それで遅刻してしまいました。
 ? ? 전철 사고가 있었던 거예요. 그래서 지각했어요.
- (45) 電車の事故がありました。それで、遅刻してしまつたんで
す。
 전철 사고가 있었어요. 그래서 지각한 거예요.

(印 2006 p. 70-71)

上記 (44) の文の許容が難しいのは、3.1.1 で述べたように、「것이다」文が原因・理由を表せないからである。それに対して、上記 (45) が許容されるのは、韓国語の「것이다」文が名詞化によって他を排除し、結末を主張する文になっているからである。つまり、まず理由を言って、その結果こうなつたと主張する形式になっているからである⁸。

次の (46) の文も、最初の「것이다」文は、ただ原因・理由を説明するために使われているため不自然であるが、ふたつめの「것이다」文は原因・理由というより、その結果生じた結末を主張するために使われているので許容されている。「～という原因・理由で～のだ」という形式がその許容を支えていると考えられる。

- (46) 友達が遅く来て
 「ごめん。ごめん」
 「遅いじゃないか。どうしたの」
 「電車の事故があつたんだ」
 「本当に事故で遅れたのか？前にもそんなこと言ってたよな」
 「本当だよ。本当に事故で遅れたんだよ」
 「친구가 늦게 와서」

⁸ 해요体などを使うことも可能であるが、その場合はただ事実を述べるだけで、話者の感情や主張を言い表さない表現となると考えられる。

「미안, 미안.」

「늦었잖아. 무슨 일 있었어?」

「*전철 사고가 난 거야.」

「정말 사고 때문에 늦은 거야? 얼마 전에도 같은 말 하지 않았어?」

「정말이야. 정말 사고 때문에 늦은 거야.」((3) の再掲)

次の(47)の文でも、最初の「것이다」文は、元気がない理由の説明に使われているため許容されないが、ふたつめの「것이다」文は、ただ怒っているのではなく、理由があつて「怒る」という結末に至つたと主張するために使われているので、許容されている。この文も、やはり、「～ではなく、～から～のだ」という形式が文の許容を支えていると考えられる。

(47) 「どうしたの?元気がないようだね」

「怒ってるんだよ」

「お前、本当によく怒るよな」

「違うよ。理由なく怒ってるんじゃない、Cが約束を守らないから怒ってるんだ」

「무슨 일이야? 기분 안 좋은 것 같네.」

「*화 난 거야.」

「너 참 화도 잘 낸다.」

「아니야. 이유 없이 화 내는 게 아니라, C가 약속 안 지켜서 화 난 거야.」

3.2.3 疑問文の「것이다」文

崔(2005)は、原因・理由を問う文での「것이다」文の必須性は低いとし、次の(48)のような例では、「것이다」文を使っても使わなくてもよいとしている。そして、「것이다」文は、説明を要求する必然性が高い時に用いられると述べている。また、「것이다」文を使うと詰問・

非難のニュアンスが生じるとしている。

(48) チェリン「どうしてこんなに遅れたの？」

ミニョン「車がちょっと混んでたんだ」

「왜 이렇게 늦게 왔어?」

「차가 좀 막혔어.」

(『冬のソナタ』 p.61)

(崔 2005 p.56)

本稿でも、同意見である。ただし、原因・理由を問う文だけではなく、質問文一般に「것이다」文が使われるとそのようになると考える。「것이다」文が使われていなければ、ただ真偽を聞くだけだが、「것이다」文が使われていると、結末を教えてほしいという強い気持ちが表される。これによって、詰問やいぶかしく感じている際によく使われるのだと本稿では考える。それは、韓国語の「것이다」が、名詞化によって他を排除し、結末を主張する文であることから生じるものだと考えられる。

よって、崔(2005)でも挙げられている次のような詰問の場面では、「것이다」文が使われている。

(49) 仕事を終えたユジン，部屋に入ると，ミニョンが立っている。

ユジン「ここで何をしてるんですか？」

지금 뭐 하는 거예요?

(『冬のソナタ』 p.107)

(崔 2005 p.56)

3.2.4 新事態提示の「것이다」文

新事態提示の「것이다」文というのは、最初に意外な結末を言う「것이다」文である。いわば、「他でもなく、なんとこのようなことが起こったのです」と新事態を提示し、話を後に続ける時に使うのである。

たとえば次のような文である。

- (50) ミヒョン「僕が友達と話をしていたら、誰かが僕のことを
ずっと見つめているんですよ。それで訊いてみたんです。
どうしてそんなに見つめるのかって」
チェリン「やめてってば」
민형「내가 친구하고 같이 이야기하고 있는데 누가 계속
나를 쳐다보는 거예요. 그래서 내가 물어봤죠. 왜
그렇게 쳐다보냐고.」
채린 「그만 하라니까.」

(『冬のソナタ』 p.80)

- (51) ドアを開けると、知らない人が立っていたんです。それで・・・
문을 열었더니、 모르는 사람이 서 있는 거예요. 그래서・・・
(52) 桃を切ると、中から桃太郎が出てきたんです。それで・・・
복숭아를 잘랐더니, 안에서 모모타로가 나온 거예요.
그래서・・・

そして、そのような新事態の提示の後、たとえば、「それで・・・した」というように話が展開してゆく形を取る。意外や驚きをもって、先に結末となる新事態を提示し、その後の話を展開するために「것이다」文を使用していると考えられる。

4. 「のだ」文と「것이다」文の領域

3. 節では、韓国語の「것이다」文で表せる「のだ」文と表せない「のだ」文を見てきた。それによると、先行研究で述べられているように、「것이다」文で表せる「のだ」文は、「のだ」文の一部だということになる。

図で示すと「のだ」文と「것이다」文の使用可能な領域は、次の図1のように、一部重なっているだけだと考えられる。Aは「것이다」文で表せない「のだ」文の領域で、Bは「のだ」文と「것이다」文の

使用が重なっている領域である。Cは、「のだ」文で表せない「것이다」文の領域で、「年寄りには親切にするものだ」「一日に8時間寝るということは、人生の三分の一は寝ているということだ」というような文が該当する。

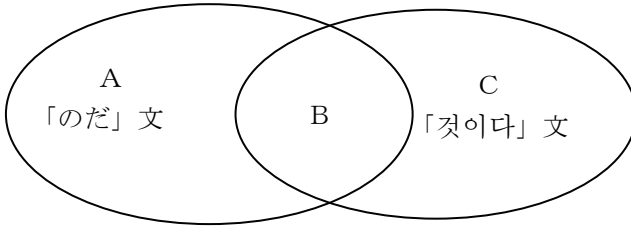


図 1

では、「것이다」文で表せない「のだ」文の部分、つまりAの領域は、韓国語ではどのように表しているのでしょうか。詳細は今後の課題となるが、およそ次の表のような分布が考えられる。Aの領域は「거든」を使ったり、해요体や합니다体を使った文で表していると考えられる。

表 4 「のだ」文を表す韓国語

のだ文		
Aの領域		Bの領域
「합니다・해요・해」 体を使う文	「거든」を使う文	「것이다」文

5. まとめ

日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文は、先行研究でも用法の差が大きいと言われてきた。本稿では、会話文に限ってではあるが、日本語の「のだ」文と韓国語の「것이다」文の用法の差が説明できる原理を明らかにしようと試みた。そして、次の主張によって、その用法の差の説明ができることを示した。

日本語の「のだ」文が、状況Pと関連づけて言い表す文であるのに対して、韓国語の「것이다」文は、状況Pと関連づけて言い表す文ではない。韓国語の「것이다」文は、名詞化によって他を排除し、結末を主張する文である。

文法化については、文法化が起こっていることは認めるが、文法化の進展の差が、「のだ」文と「것이다」文の使用の差をもたらしているとは考えない。むしろ、日本語の「のだ」文は、状況Pと関連づけて言い表す方向へ文法化が進み、韓国語の「것이다」文は、名詞化によって他を排除し、結末を主張する方向へ文法化が進んだと考えられる。

今後の課題としては、表4で示した「のだ」文を表す「거든」や「해요」体等の使用原理を明らかにすることである。それにより、日本語を学ぶ韓国語母語話者や、韓国語を学ぶ日本語母語話者の誤用を少なくすることに貢献したいと考えている。

用例の出典

『『冬のソナタ』で始める韓国語～シナリオ対訳集～』ユン・ウンギョン、キムウニ著（2002年）、安岡明子訳（2003年）キネマ旬報社

参考文献

印省熙（2006）「日本語の「のだ」と韓国語の「-ㄴ것이다」『朝鮮語研究』3 51-94

金廷珉（2007）「日本語の「のだ」と韓国語の「KES-ITA」の意味に関する対象研究」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』2 123-133

崔真姫（2005）「「のだ」と「것이다 geosida」の使用条件の異同」『人間文化H&S』20号 神戸学院大学 51-59

佐治圭三（1998）「「～のだ」の中心的性質」『京都外国語大学研究論叢』

50 208-217

佐治圭三 (2003) 「「～する」と「～するのだ」・「～だ」と「～なのだ」

『無差』第10号 京都外国語大学 17-33

田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰ－「のだ」の意味と用法－』

和泉書院

野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版

益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』くろしお出版

(大阪府立大学大学院人間社会学研究科 博士後期課程)